

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 29 年 6 月 12 日現在

機関番号：12611

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2015～2016

課題番号：15K16808

研究課題名(和文) 教育的応用に向けた学術論文の分野横断的・包括的ジャンル分析

研究課題名(英文) A cross-disciplinary and comprehensive genre analysis of research articles for educational applications

研究代表者

マスワナ 紗矢子 (Maswana, Sayako)

お茶の水女子大学・基幹研究院・講師

研究者番号：60608933

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 1,200,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は、学術目的の英語において特に重要なジャンルである学術論文について、修辞構造と表現を中心に分析を行い、アカデミックライティング教育での学習内容を提案することを目標としている。四分野の英語論文コーパスを構築し検討した後、通時的変化を医学と経済学論文を用いて分析し、分野間の類似点と相違点をディスコース・コミュニティーの文化や慣習に基づき説明するとともに、学術目的の共通語としての英語についての考察を加えた。学際的研究論文が散見することから、情報通信技術分野の論文を例に取り、学際的分野の論文執筆についての分析も加えた。研究結果から、ライティング学習内容および今後の研究への示唆を得た。

研究成果の概要(英文)：To provide a resource for academic writing instruction, this study investigates English research articles, a particularly important academic genre, of four disciplines based mainly on rhetorical structures and expressions. In addition to revealing some disciplinary writing conventions, the introductory section in the disciplines of medicine and economics was examined for diachronic changes. The similarities and differences between the disciplines were explored from the perspectives of discourse community culture and practice and English as an academic lingua franca. As the articles in social sciences seemed interdisciplinary, research articles in the information and communication technologies field were used to explore interdisciplinary writing. Through collaboration with the discipline expert, features pertaining to interdisciplinary writing have been discussed. The results of comprehensive analysis provide insights into the academic writing education as well as the future research.

研究分野：英語教育

キーワード：学術目的の英語 ジャンル 学術論文

1. 研究開始当初の背景

日本の大学英語教育では近年、学術目的の英語 (English for Academic Purposes: EAP) 教育・研究に注目が集まっている。中でも、特に重要な学術ジャンルである研究論文についての分析が多く行われ、分析結果がライティング教育に応用されている。従来のジャンル研究では、特定分野の論文の単一セクションに焦点が当てられ、規範的な修辞構造や特徴的な言語使用を調査したものが多く、ジャンル・アプローチでは、対象分野の文化や慣習、著者と読者との関係性といった観点から調査結果が説明されるため、当該ジャンルの理解、分野の文化や慣習への気づきにつながり、学習者が目指すディスコース・コミュニティへの参加が促されると考えられている。

従来の研究対象やその定義は研究によって異なる部分が見受けられる。まず、実験を扱う理系分野が分析対象となることが多く、文系の場合は、分析を行う応用言語学者の専門に近い言語学や教育学が対象となっている。学際的分野についての研究は極めて少ない。分野によって論文の修辞構造や使用表現における違いが大きいと報告されているが (e.g. Hyland 2002) 分野横断的な実証研究は限られている。単一分野内でのテーマや研究方法による論文の修辞構造の多様性、学術雑誌の影響や通時的な変化 (e.g. Hyland & Jiang, 2016) 等、さらに考察されるべき観点が残っている。

また、テキストの分析対象が論文全体であることは少なく、典型とされる IMRD 構造の論文が前提となっている。学術論文のジャンル分析をより充実させるためには、今までに欠けていた観点を含み包括的な研究が必要と考えられる。

大局的な視点を取り入れた研究を行うことで、各分野の学習者や教授者にライティング教育内容を提示するという貢献のみならず、分野横断的な EAP ライティング教育への応用が期待される。

2. 研究の目的

英語学術論文について、修辞構造と表現、語彙文法の観点から分析を加え、アカデミックライティング教育に有用な当該ジャンルの知識、言語 (英語) 技能を提示することを最終目標とする。そのために、医学・工学・経済学・社会学の学術雑誌から選出した英語論文からなるコーパスを構築し、修辞構造と表現の分析、近年の論文構造と英語使用に見られる特徴、分野間の相違を考察する。また、ディスコース・コミュニティの慣習や環境、理系や文系の枠組みを越えた学際的研究といった分野の考察も含む。幅広い包括的な観点から当該ジャンルの英語使用を考察することを目的とし、2年間のプロジェクト期間で質的な考察を含むため、データサイズが比較的小さいものとなるが、最終的には広くラ

イティング教育への示唆を得ることを目指すものである。

3. 研究の方法

インパクトファクターと各分野の文献を参考に、医学・工学・経済学・社会学、それぞれ代表的な三雑誌から英語論文を無作為に抽出し、修辞構造の予備調査を行った。その結果から分析が可能と考えられる論文数を決定し、各分野 60 論文からなるコーパスを構築した。過去 20 年で電子ジャーナルが浸透し、学術界もグローバル化が飛躍的に進んだことから、通時的な観点の分析も必要であると思われたため、各分野 1995 年から 30 論文、2015 年から 30 論文を基本とした。通時的な観点を含めることで、より規範的な特徴が導き出されると思われた。さらに、比較対象として参考にするために、応用言語学の論文についても同様にコーパスを作成した。

次に、本文と要旨の分析は、修辞構造の単位としてムーブ (e.g. Swales, 1990) を採用し、その枠組みは Nwogu (1997) と Hyland (2004) に依拠し、適宜修正を加えた。主に研究代表者が、言語的指標、見出し、内容を参考にして手作業で最新の論文テキストを各ムーブに識別した。ムーブの下位区分については参考に留め、全体の流れを提示することを目指した。

通時的な観点を含めた分野の特徴については、医学と経済学論文の序論と題目を対象に、Li & Ge (2009) と Soler (2007) を参照し、修辞構造と語彙文法の分析を中心に比較検討した。分野共通の変化とそうでないものが明らかになった。主に文献から当該分野の動向を見極めるとともに、専門家の意見を参考にし、学術目的の共通語としての英語の観点から変化についての考察を加えた。

社会科学分野の論文においては、その学際的な特徴が顕著であったため、対象論文を絞ったうえで、修辞構造と表現の詳細な検討を行うこととした。そこで、情報通信技術 (ICT) の専門家と協働して研究を進めた。対象論文は、ICT が社会に及ぼす影響についての研究と限定した。当該分野は、情報学、経済学、心理学といった分野の知見を応用しているが、研究テーマにより関連する分野が異なるため、ケーススタディとして、本研究に協力した専門家の研究に関連する論文 16 本を対象とした。関連する分野は、コミュニケーション学、社会心理学、政策学等である。量的、質的研究論文双方のバランスを考えて論文を選出した。論文が選出された三雑誌は、すべて学際的アプローチを中心としている。分析においては、研究や学術雑誌の種類を考慮した。

当該分野については、研究代表者がムーブの識別方法を専門家に説明したのち、分析は主に専門家が行い、適宜研究代表者と確認作業を行いながら、ムーブに特徴的な表現を対象論文から抽出した。

4. 研究成果

ムーブに識別されたコーパスが構築され、今後更なる検討を加えることが可能となった。

分野間の類似点と相違点を明らかにするために行った医学、経済学の序論と題目を用いた通時的な変化の検討では、序論の修辞構造においては二分野ともに大きな変化は見られず、全体として Swales (1990) が提唱したムーブの枠組みに基づいた修辞構造が維持されていることが明らかになった。同時に、両分野で序論が大幅に長くなり特定ムーブの反復が増えていることから、研究が蓄積され競争が厳しくなる現在、以前に増して研究の重要性や位置づけを詳しく説明する必要があることが示唆された。時制においては、医学論文では特定ムーブで現在形の使用増加が認められたが、経済学においては以前と同様に現在形が序論の全ムーブで多く使われていた。その他、両分野において受動態の占める割合が有意に減少した。一文の語数も共通して増えていたが、医学では、Biber & Gray (2010) が指摘した節を用いない修飾による圧縮された (“compressed”) 文、経済学では重文や複文等による語数の増加傾向が伺えた。

題目においては、1995 年は二分野とも nominal group construction が半数以上であったが、医学では 2015 年に compound construction が過半数となっていた。語数が増えた医学の題目は、研究課題や方法、結果がより具体的に記述され、経済学では語数の増加は見られなかった。

二分野の相違点を考察すると、医学においては近年、共著者数が大幅に増え、メンバー構成もグローバルになっている。国際誌の論文は高度な校正を経たものであり、英語使用の変化への直接的な影響要因を探ることは容易ではないが、英語がさまざまな言語的背景を持つ研究者に共有されやすい形へと変化していることが予想される。英語が情報伝達のためのツールとして位置づけられ、オンライン検索にも対応した研究内容の記述に変化しているとも考えられる。

一方で、経済学のような社会科学分野では、知識の構築が言語に依存することが多く、英語であれば英語圏の文化の影響を少なからず受けているといえよう。また、共著者の大幅な増加も見られず、テーマは比較的文脈に依拠するものとなっている。英語の学術雑誌においては、従来の基準が継承されやすいと推測される。以上、通時的な観点からの分野間の類似点および相違点が明らかになったが、各分野での学術目的の共通語としての英語の役割に関連していることが考えられる。

学際的分野の ICT 論文については、その分野のみに特徴的な修辞構造は見られず、量的研究と質的研究で修辞構造に違いが伺われたが、雑誌による顕著な違いは見られなかつ

た。量的研究では、当初のムーブの枠組みに沿った構造が主に使われていたが、仮説を展開する、というムーブが新たに加えられた。このムーブは二つの下位区分から成り立っており、1) 複数の概念と要因を説明しながら理論的枠組みを提示し、2) その枠組みから仮説を導き出している。質的研究については、統一した修辞構造は見られず、論文間のばらつきが大きかった。複数分野の知見を統合して研究を展開する学際的分野ではあるが、ICT 論文の修辞構造においては、複数分野の統合は見られなかった。

表現については、研究の意義、政策への提言、研究の限界と今後の研究について、まとめのムーブでの明示的な表現が特徴的であった。これらの表現は、質的研究論文に比べ量的研究論文での使用割合が高かった。

多くの分野において研究が高度に専門化されており、学際的分野も例外ではない。一方で、論文の読者やディスコース・コミュニティは、学際的分野では特に幅広く、背景知識や文脈を共有していない場合を想定して書かれている。このことは、明示的な表現、類似表現の繰り返しによる明示性に反映されている。同時に、学際的分野では政策提言を目的とした研究が多いことや、当該分野の分析対象自体が変化に富み多面的であることもこの明示性に関連しているとも考えられる。

学際的研究論文について、ケーススタディを用いて考察し、対象論文の特徴を提示すると同時に、学術論文の概念的枠組みに新たな知見を得ることができた。学際的な研究分野では言語技能や専門知識に関して多様な背景を持つ学習者が集まる傾向にあるため、本研究のような調査が引き続き必要となるであろう。

以上、比較的小規模なデータを使った探索的な研究ではあるものの、学習者のニーズに応じてライティング教授者が行うことが可能なジャンル分析を例示できたと考えられる。結果の一部をまとめた二論文については、現在査読中となっている。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計 1 件)

Sayako Maswana (2016). A genre analysis of research articles from a chronological perspective. *Journal of the Ochanomizu University English Society*, 6, 27-36. (査読有)

[学会発表](計 3 件)

Sayako Maswana. Changes in research articles from 1995 to 2015: An analysis from an ELF perspective. The 6th Waseda ELF International Workshop. 2016 年 11 月

12日, 早稲田大学(東京都).

Sayako Maswana. A genre analysis of research articles in the field of information and communication technologies. 2016 International Conference and Workshop on English for Specific Purposes. 2016年10月27日, 台南(台湾).

Sayako Maswana. A chronological and cross-disciplinary analysis of research articles. The 3rd AILA East Asia & 2016 ALAK-GETA Joint International Conference. 2016年9月10日, クァンジュ(韓国).

〔図書〕(計 0 件)

〔産業財産権〕

○出願状況(計 0 件)

名称:
発明者:
権利者:
種類:
番号:
出願年月日:
国内外の別:

○取得状況(計 0 件)

名称:
発明者:
権利者:
種類:
番号:
取得年月日:
国内外の別:

〔その他〕

ホームページ等

6. 研究組織

(1) 研究代表者

マスワナ 紗矢子 (MASWANA, Sayako)
お茶の水女子大学・基幹研究院・講師
研究者番号: 60608933